

部室移転問題

間もなく梅雨の季節を迎え、本年4月に開設した葛飾キャンパスの緑も、より一層鮮やかさを増すだろう。図書館へと続く幅広の一本道が印象的な新キャンパスは、学生と地域住民たちで一日中賑わっている。私たち学生はその真新しいキャンパスに心を奪われる一方、その開設と同時に本学が手放した神楽坂キャンパスの九段校舎を思い出すことも多いだろう。九段校舎の現状を知りたいという思いから、葛飾キャンパスの管財課の方に話を伺うことにした。

昨年度の九段校舎が閉校に伴い、九段校舎の部室を使用する団体は葛飾キャンパスもしくは神楽坂校舎へ余儀なく移転をすることになった。しかし、神楽坂校舎には、すべての希望団体を受け入れる部室数がない。そのため学生支援センター(当時：学生部)は「学友会常任委員会」、「I部

体育局」に協力を依頼し、神楽坂キャンパスで部室を使用する全団体(第二部を除く)に対して葛飾キャンパスへの部室移転を呼びかけ、希望した部やサークルが葛飾キャンパスに移転した。

そこで問題となるのが、部室移転により部室がなくなった神楽坂キャンパスに通う学生の活動だ。当初は移転するつもりが

学生支援センターでは、そのような学生が活動がするために必要な備品の保管場所として複数の団体が共有で使用する倉庫を可能な範囲で貸し出し

なかつた団体も葛飾キャンパスを見学して検討してみようだろうか。2016年、経営学部の2、4年生が神楽坂キャンパスへ移転するにあたり、「部室問題」が再度生じることが懸念される。各団体はこれからも、この問題と向き合っていかなければならないだろう。

チケットの購入はこちら↓
・劇団四季予約センター
0120-489444 (午前10時～午後6時)
・SHIKI ON-LINE TICKET URL:www.shiki.jp/tickets/
JR 東日本アートセンター 四季劇場「春」「秋」
東京都港区海岸1-10-48

神楽坂地区 第65回理大祭 企画参加団体募集中!



神楽坂地区 理大祭公式マスコットキャラクター しかまる

理科大生のみんな!!一緒に理大祭を盛り上げてみないかー!?
みんなの参加をお待ちしているのだー!

- ◆4人以上から参加できます!!
- ◆サークルじゃなくても大丈夫です!!
- ◆まずはメールでお問い合わせ!!

※次回の会議は6月15日(土)です。
詳しくはお問い合わせください。

お問い合わせ
神楽坂地区理大祭実行委員会
info@kagu.ridaisai.com
理大祭ホームページ
http://www.kagu.ridaisai.com/xoops/

九段校舎の今

九段校舎はもとと旧都市基盤整備公団の本社であった。その当時、神楽坂校舎の再構築計画があつたため、一時的な床面積確保の目的で、元々の建物の設備はほとんどそのまま使い、外装だけ新しくするというかたちで2004年に設立された。しかし、神楽坂校舎の新築工事の協議は予想以上に難航した。新宿区の条例改正に伴い、神楽坂には高層ビルが新築できないのだ。

その頃、野田キャンパスと神楽坂キャンパスのちようちよ中間地点に位置する葛飾への新キャンパス設立案が挙がった。この案が有力であつたことから、結局昨年度まで九段校舎は大きく手を加えられることなく使用された。充実しているとは言えない設備が学生に不便ではないか気がかりだったと、管財課の方は振り返る。

葛飾キャンパス設立後の九段校舎に関しては、そのまま所有することも含めてたくさんの協議がなされたが、結局手放すという結論に至った。元々九段校舎の隣にあつた社団法人実践倫理宏正会が買収したという。今後どのように使われるのかはわからない。九段校舎の残留物も5月末には完全に撤去されたそうだ。

今後は、九段校舎という言葉を聞くこともほとんどなくなるだろう。この校舎を長く使ってきた学生にとつて、そのことは少し寂しいかもしれない。しかし新キャンパス設立や校舎移転という、本学の歴史に残る発展を実際に体験できたことは実に貴重なことではないだろうか。

丘『李香蘭』の三作で一つのシリーズであり、それぞれ第二次世界大戦中の日本とインドネシア、ソ連、中国を舞台に人間ドラマが切なくも悲しく描かれている。今回はその一つ『ミュージカル南十字星』を体験レポートと共に紹介していく。

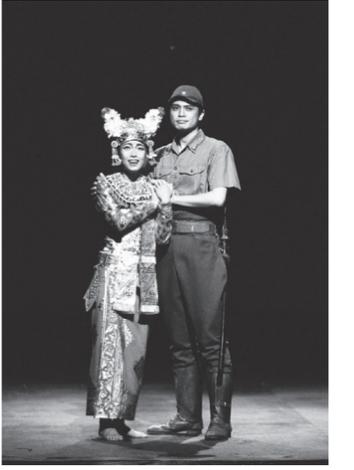
BC級戦犯という言葉をご存知だろうか、これは第二次世界大戦の戦勝国である連合国が布告した戦争犯罪を取り締まる条例に基づき、分類された罪状である。主人公の保科勲は一人の軍人として激動の時代を生きたが、敵国の軍人に対しても手を差しのべるような優しい男だった。しかし勲は敗戦後、その優しさゆえに真実を伝えぬまま戦犯を判決され絞首刑となり命を落とす。この作品は、

題材としては珍しい「BC級戦犯」の悲劇に焦点をあて、ひとりの青年がどのような思いで刑を受け入れたのかを描いている。これからの生きる世代へ、託す思いを感じる作品だ。

時代は戦下、1940年から日本は米英の物資援助ルートを遮断する目的で東南アジア各国に進出した。南方の豊富な資源を手に入れた日本はついに米英オランダと全面的に対立し、太平洋戦争へと突入していく。インドネシアはかつてオランダの植民地であつたが、日本は解放軍という形でインドネシアを日本領とし、農業技術や教育を指導した。しかし、実際は植民地支配国がオランダから日本へと代わつただけに過ぎず、真の自由とは程遠かつた。戦前から戦後までの日本とインドネシアとの関係をその時代の背景と共に生々しく、そして大胆に描いている。舞台での台詞は時代を超え直接たち語りかけてくるようであり、それは今の自分のあり方を考えさせられる。

劇中では所々にインドネシアの民謡や踊りが登場する。その衣装の華やかさ、踊りの力強さは素晴らしい。動き、演出、言葉、その一つひとつが作り込まれており、心を掴まれる。民族楽器による演奏は独特なリズム、メロディを奏で、体で感情を表現するかのよう。また、インドネシアに伝わる歌として、「ブンガワン・ソロ」という優しい旋律の中に独立への想いを込めた歌、「インドネシア・ラヤ」という格調高い歌詞とメロディで独立と解放を求める歌(現在のインドネシア国歌)が登場する。どちらも役者の方々が見事に歌い上げており、言葉が心に語りかけてくるようであつた。

今年で戦後68年を迎える。我々人間は愚かにも戦争を繰り返してきた。戦争の無意味さ、そして平和の尊さを私たちに間接的に考えさせ、今後生きて行く上で心に留めておくべきことを知つた作品だつた。最も印象的だつたのが勲の「小さな死の積み重ねで歴史は動く」という言葉だ。今の日本が先人達の多くの「死



▲『南十字星』の舞台風景
撮影：上原タカシ